

## 「お買い物の中毒な私！」

\*\*\*

2009（平成21）年6月14日鑑賞<梅田ピカデリー>

監督：P. J. ホーガン

製作：ジェリー・ブラッカイマー

原作：ソフィー・キンセラ『レベッカのお買いもの日記1』

『レベッカのお買いもの日記2 NYでハッスル篇』

（ヴィレッジブックス刊）

脚本：トレイシー・ジャクソン、ティム・ファース、ケイラ・アルパート

レベッカ・ブルームウッド（ファッション誌の編集者を夢みる女性）／アイラ・フィッシャー

ルーク・ブランドン（お固い経済雑誌の編集長）／ヒュー・ダンシー

ジェーン・ブルームウッド（レベッカの母親）／ジョン・キューザック

グレアム・ブルームウッド（レベッカの父親）／ジョン・グッドマン

スーズ・クリース＝スチュアート（レベッカの親友の女性）／クリステン・リッター

アリシア・ピリントン（脚長の美人モデル）／レスリー・ビブ

アレット・ネイラー（セラピーを主催する女性）／クリスティン・スコット・トーマス

エドガー・ウェスト（ファッション誌『アレット』のオーナー社長）／ジョン・リスゴー

2009年・アメリカ映画・105分

配給／ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャーズ ジャパン

### <公開のタイミングは最悪？>

『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズで大成功をおさめたジェリー・ブラッカイマーがロマンティックなラブコメの製作にチャレンジ！恋にも仕事にも意欲的に頑張る25歳のヒロイン、レベッカ・ブルームウッドを演ずる新星アイラ・フィッシャーは出演作も少ないから、本作が主役としての初デビュー？

女性上位の国アメリカ(?)では『セックス・アンド・ザ・シティ』(08年)など大人の女性向けの映画や、『ブラダを着た悪魔』(06年)など女性ファッション誌のような映画が常に一定の人気を得ているが、本作も明らかにその延長線上にある。したがって、その見どころの1つは当然レベッカが着る華やかな衣装の数々だが、残念ながら私はそれには全然興味なし。私の興味は、カード社会のアメリカで生きる若い女性特有の「お買い物中毒」病なるものの実態を明らかにすることだ。

日本でもサラ金破産や多重債務者問題が深刻だが、カード社会で消費志向の強いアメリカはもっと深刻なはず。したがって本作のテーマは本来深刻な社会問題だが、それを恋と仕事を絡めたラブコメ風に仕上げたところがミソ。もっとも、そんな「消費は美德」とばかりに借金をしてモノを買いまくったアメリカが陥ったのが2008年秋以降の国際的金融危機だから、そんな責任を考えたならアメリカ人もこんな映画を観て明るく楽しく笑ってばかりいられないのでは？

そんな私の心配どおり、5月30日に公開された本作の6月14日における観客はガラガラ。こりゃやっぱり、公開のタイミングが最悪だったのでは？

### <「緑のスカーフ」が書くコラムのキレ味は？>

前述のとおり、本作の見どころの1つはレベッカのファッションだが、私の興味は「お買い物の中毒」病の実態の他、「緑のスカーフ」なるペンネームでレベッカが書いたコラムの切れ味。お買い物の中毒によってカードがすべて無効となり、会社もクビになったレベッカが、なぜルーク・ブランドン（ヒュー・ダンシー）を編集長とするお固い経済雑誌でコラムの執筆を？ひょっとして、こりゃ色仕掛け？ついそんな風に勘ぐりたくもなるが、そこはラブコメのノリでスイスイと・・・。

そのコラムに求められたのは、庶民が直面するさまざまな金融問題をわかりやすく解説することだが、そこでレベッカがGoogleからの資料のよせ集めではなく、自分の体験談をもとに書いたのが読者に受けて大ヒット。私は難しい金融問題を最も理路整然とわかりやすく解説するのは竹中平蔵氏だと思っているが、レベッカの解説はそれとは全く異質の視点と体験にもとづくもの。ファッション誌『アレット』のオーナー社長であるエドガー・ウェスト（ジョン・リスゴー）も、そんなレベッカのコラムの魅力にぞっこん。

私も『シネマルーム』のコラム書きには毎回苦労しているから、「緑のスカーフ」が書くコラムの切れ味に学ばなければ・・・。

### <登場人物は成功者ばかりだが、現実とは？>

私はまだ『蟹工船』(09年)を観ていないが、本作は『蟹工船』の視点とは全く逆で、レベッカの周りは成功者ばかり。添えもの的に登場する(?)レベッカの親友のスーズ・クリース＝スチュアート（クリステン・リッター）はボーイフレンドとスナリ、ハッピーウェディングになるし、『アレット』の脚長のモデル、アリシア・ピリントン（レスリー・ビブ）もあまり美人とは思えないが大成功している女性。

それだけでも十分現実離れしているが、更に現実離れしているのは、一見仕事中毒だけの編集長かと思ったルークが実は某財閥の御曹司だということが判明すること。こりゃひょっとして・・・とレベッカが期待したのは当然だが、それは利害打算から？それとも愛から？そこらあたりがアメリカ発のロマンティックラブコメの面白さだが、さて本作における2人の愛の展開は？

ハッピーエンドになることは最初からわかっているから気楽に観ればいいのだが、大切なことは、これはあくまで映画の中だけだということ。どちらかというと、現実とは本作ではなく、『蟹工船』の方が近いのでは・・・。

2009（平